

# ポプコーンの降る街

作 み群杏子

登場人物

娘

探偵

女

老人

男

## 1 探偵社

古いビルのなかにある一室。

隣には路地をはさんで、HOTEL REGRET  
(ホテル・リグレット)の小さなネオンサインが見える。都会のかたすみの  
忘れられたような場所である。

古色蒼然とした書物机、ロッカー、  
洋服掛けにはよれよれのコートと帽  
子が掛けられている。電話、応接用の  
丸テーブルに椅子が二脚、といった殺  
風景な部屋に、まだ描き上げていない  
若い女の肖像画が一枚。

右手が入口。左にそれぞれ PRIVATE  
と TOILET と書かれた二つのドアがあ  
る。

ここは、うらぶれた探偵の事務所兼住  
居でもあるのだ。

一人の娘、両手にいくつもの紙袋を  
抱えて、入ってくる。年は十代の後半

といった所。娘、紙袋を丸テーブルの上に置いたのちに、PRIVATEと書かれたドアを開ける。居ない。次はTOILETのドアの前で耳をすませる。何かの気配を感じると、娘、なっとくして、テーブルの上の紙袋を解き始める。

日用品、食料といった類から、虫メガネ、コーモリ傘、カメラ、ウォークマン、トランシーバー、そして最後に取り出したのはピストルである。

娘、思い立って、机の引き出しの中から、探偵の変装用のサングラスをかけてみる。洋服掛けからコートを取って、帽子をかぶる。ポーズ。

その時、トイレの水の流れる音。はっと身構え、トイレのドアの陰にかくれる。トイレのドアが開く。中から髪をぼーぼーにした男が出てくる。

探偵。年令不詳。若いといえば若く、中年といえば中年に見える。

娘、探偵の背中にピストルを突きつける。

娘　ホールドアップ！

探偵　おっと（と、手を上げる）

娘　なにか言い残すことはないか。

探偵　死ぬ前にコーヒーが飲みたい。

娘　あ、コーヒー買ってくるの忘れた。

探偵　なに買ってきたんだよ、もう。

（と、テーブルの買物の山を見て）

コーヒー買いにいつてくるって、出ていったんじゃないのかよ。

（振り向いて娘のピストルを見て）

なんだよ、それ。

娘　二五口径モデル。本物そっくり。

探偵　無駄遣いするなよな。事務

娘 所開いたばかりで金かかるのに。  
有能な探偵には、ぜったいに必要な  
ものばかりだぜ。

探偵 探偵小説の読みすぎじゃないか。  
娘 (今度は探偵の胸にピストルを突き  
つける)

探偵 なんだよ。

娘 チャンドラーいわく、「続きに詰まっ  
た時には、拳銃を構えた男を登場さ  
せよ」

探偵 そうか、それでわかったぜ。出来損  
ないの探偵小説に、死体がゴロゴロ  
転がっているわけが。

娘 死体の山を前にして、主役は一人の  
間抜けなホームズ。そして、あえて  
脇役に甘んじる優秀かつチャーミン  
グなワトソン嬢。

探偵 なんでチャンドラーにホームズが出  
てくるんだよ。

娘 ここじゃ、何でもありさ。

探偵 どうでもいいけど、ワトソン嬢、お  
茶を一杯いただけませんか。

娘 紅茶、入れてあげるよ。(袋をひっく  
り返して) 紅茶、紅茶と… あ、  
あった！ ちょい待ち。(と、奥に行  
こうとする)

探偵 (娘の襟首をつかまえてコートと帽  
子を脱がせて、サングラスを外させ  
る)

置いてけよ。

娘 (コートを洋服掛けに戻して、テーブ  
ルの上のものをつまみ上げて苦い顔)  
広告、出してきてくれた？

娘 (奥から)「愛と信頼のきづなをより  
固いものに。いつでもご相談下さい。  
秘密厳守。料金低額。優秀なスタッフ

がお待ちしています。浮気調査に迷子  
捜査、遺失物発見、なんでもOK。

迅速確実。ソラミミ探偵社」

探偵  
： 上出来だ。

娘  
（カップを二つ持って出てくる）

でも、どうしてソラミミなんて名前  
にするのさ。どうして野放風太郎って  
自分の名前出さないの？

探偵  
のばなしふうたろう？ へっ、そんな  
保護鑑札の必要な野良犬みたいな名  
前出せるか。なんてったって、ソラミ  
ミだよ。

ようこそ我が探偵社へ。聞こえたふり  
して聞こえない正義の声。お客は耳を  
すまして事の真相を聞き逃すまいと  
するけれど、すべては忘却のかなた。

娘  
いまだかつて一件の事件も解決した  
ことなし。依頼人達の喧々囂々の非難  
の声もどこ吹く風と、あっちからこっ  
ち、警察沙汰になるところを辛うじて  
すり抜けて、営業許可も下りぬまま北  
の果てから南の果てまで、名前を変え、  
姿を変え、あなたの道楽商売に付き合  
わされて、あたしは恋人もできやしな  
い。

でも、不思議。お客はたいていだま  
れちゃうのよ。嘘八百の報告書に。  
なんでさ？ のばなし君。

探偵  
簡単さ。嘘であろうが何であろうがお  
客が心の底で願っている解決策を出  
してやればいいんだ。どうせみんな、  
信じたいことしか耳に入れようとし  
ないんだから。

奥方からの浮気調査なら、「御安心下  
さい。旦那様は潔白です」と言ってお  
いて、旦那の方に「実は奥様からこう

こうこういう調査の依頼が有りまして。いえ、御安心を。すべては私にお任せあれ」すると旦那はよろこんで僕の懐に、わずかとは言えない志を突っ込んでいくといった案配。

娘　それって、犯罪じゃない？

探偵　騙し騙されて、家庭は円満。世の中は上手くいく。ほら、言うじゃないか。

と、探偵、古い歌謡曲「東京ブルース」の一説を口ずさむ。

娘　なにそれ。

探偵　チーホフだったかな。

娘　歌謡曲だろ。

探偵　知ってるんじゃないか。

娘　言っとくけど。

探偵　なんだ。

娘　あんまり古いセリフは、言わないほうがいいよ。あんた、二五歳なんだから。

探偵　（自分を指差して）ほんとに二五？

娘　… そうだろ？

探偵　ほんとに？

娘　… 三五だっけ？

探偵　… そうだっけ？

娘　四五ってことはないと思うけど…

もう、幾つだっでもいいじゃないか。自分で鏡見て考えろよ。

探偵　まあいい。そっちこそ人間だっけと忘れるな。そり、シツポ！

娘　（あわててお尻をさわる）びっくりさせるなよ。

探偵　しかし、時々わからなくなる。なあタキ、僕たちは、何のために、こうも転々と流浪の旅を続けるんだ。

娘　あんたにわからないものが、あたし

にわかるわけないだろ。

探偵 それにこの絵だ。(と、壁の肖像画を見る)

娘 あんたが描いたんだろ。

探偵 うん。…でも、完成していない。

娘 じゃまくさかったんじゃない？

探偵 覚えてないんだ。

娘 恋人なんだろ？

探偵 そうかな。

娘 忘れたの？

探偵 そうだったような気がする。どつちにしても、捜さなきゃならないんだ。僕はずっと、この女を捜してる。女を捜すという使命感が僕を探偵にしたと言っけていい。それなのに、いつこうに見つけられない。

娘 いつか逢えるさ。あんまし、思い詰めないほうがいいよ。

探偵 ……ありがとう。ところで、今、何時だ。

娘 あれ、もう六時すぎだ。

探偵 閉店だ。腹へったな。タキ、夕御飯の用意しろよ。

娘 態度でかいぞ。近頃じゃ、女に料理させるっていうのは、犯罪的なんだぜ。素晴らしいながらも、優秀かつチャームなワトソン嬢は、かわいそうなホームズ君のために、健気にも夕御飯の用意を始めるのです。タキはやさしいなあ。(と奥に消える) たのんだぜ。

娘 まったく。

娘、ビسケットを齧りながらテーブルの上を片づけていく。

娘

さて、今夜は何にしようかな。タキ特製シヤケとほーれん草のグラタンに、サンマのブロバンス風。卵おじやにデザートはいわしのプディングと…  
お酒は、白ワインの牛乳割り。

と、入口の来客を知らせるベルが鳴る。  
娘、聞き耳をたてる。  
と、もう一度ベル。

娘

お客だ！

ドアをあけると、女が立っている。  
目立たない平凡な主婦といった感じ。  
なぜか手にサラダオイルの缶を持っている。

女は、すたすたとなかに入ってくる。

あの…

入口に書いてあったけど… ここ

探偵社？

うん。

へえ… 探偵か。やっぱりね。

なんのこと？

ここに、ぼさぼさとした頭の男が  
いるでしょ。

いるよ。

そいつが探偵ね。

そうだけど…

あわせて。

… いま、呼んでくる。あ、座る？  
お構いなく。

ビスケット、食べる？

お構いなくって言うてるでしょ！

女 娘 女 娘 女 娘 女 娘 女 娘 女 娘 女 娘 女 娘 女 娘 女 娘 女 娘

娘 (ぶつぶつと小声で) なにさ… 変なの。… サラダオイルなんか持つちやって。

探偵 (奥から出てきて) ようこそ、いらつしやいませ。さ、さ、どうぞ。

(と、椅子をすすめる)

女 (男をじっと見る) そらぞらしい。

探偵 … なにか？

女 しらばっくれる気？

探偵 ええ？

女 私をつけてたでしょ！

娘 喧嘩売りにきたの？

探偵 (娘に) お茶。

娘 だって…

探偵 いいから、あっち行つてろ！

(と、奥に押しやる)

…どういうことですか？

女 あれは二日前のことだったわ。買物の帰り、ふと誰かの視線を感じて振り向くと、電柱の陰にあわてて隠れた一人の男がいた。よれよれのコートを着て、いかにも変装といった感じのサンダラスに帽子。(と、洋服かけのコートと帽子に目を移しながら) まるで、まぬけな探偵を絵に書いたような、とでも言ったらいいのかしら。

私はマンションの七階の部屋まで走って帰ってドアに鍵をかけた。胸をドキドキさせて、窓の隙間からそっと覗いてみると、さっきの男が、児童公園のアカシアの木の陰から、こつちを伺っているじゃないの。黄昏時の、沈んでいく夕日のなかに佇む痩せこけたシルエット。

男は、ポケットからたばこを取り出して、二、三服吸うと、数メートル先



の電話ボックスに入って電話をかけた。

と、その時…

と、ここで電話が鳴る。二人は飛び上がる。娘が出てきて受話器を取る。

娘

はい、こちらソラミミ… いえ、ソラミミ…え、どういうこと？ …OK、焼き飯とラーメンときょうぎ二人前ね。わかった、わかったからそう怒鳴らないですよ。すぐに配達しますよ。(と言って切る) バーカ、永遠に待ってろってんだ。(と、また奥に入る)

女

… どこまでだっけ。

探偵

あやしげな男が、電話をかけに、電話ボックスに入った所までです。

女

そう。… と、その時、リリリリ…

と、突然うちじゅうに鳴りひびく電話のベル！ 八回、九回。十回。ベルは十回鳴って切れた。

探偵

出なかつたんですか？

女

だって、わかつてるじゃないの。誰

がかけてきたかは。

探偵

その男ですね。

女

あなたよ！

探偵

僕じゃないですよ。

女

気がつくと、電話ボックスからあなたは消えていたわ。

探偵

僕じゃないったら。自慢じゃないがここ二、三日は仕事もなくて、ここで寝てたんだから。

娘

(お茶を持って出てきて) それはあたしが保証するわ。

探偵 (女に) 証拠があるんですか。

女 証拠は、(と、テーブルの上のサンダ

ラスをかけて)このサンダラスと、(洋服かけを見て)あのコートと帽子よ。

探偵 あんなのは、どこにでもある。

娘 あのコート、バーゲンで一万九千八

百円だったんだよ。

女 (サンダラスを外し) まだあるわ。

次の日、つまり昨日よ。夕方、またぼんやりと窓の外を見ていた私の目にはるかむこう、暮れていく街の車の洪水が見えた。その国道にかかる陸橋の上、とぼとぼと歩いていくのは、一万九千八百円の白いコートの男。すこし猫背気味の後ろ姿は、確かに昨日の、そう、あなたよ!

探偵 決めつけるなって。

女 見失ってなるものか!

娘 つけたのね!

双眼鏡でね。あなたは陸橋を渡り、ドーナツショップの大きなねじりドリナツの看板の前を通り、煙草屋と美容院の間の細い道を曲がって、映画館の前で立ち止まった。いいだもも主演「マリファナ物語―ちよつと危ないけどすごくハイ―」っていうやつ。ばかばかしいほど長い間迷った末、結局観るのは止めて、：観ればよかったのに、おもしろかったわよ。

娘 観たの?

ええ。マリファナによるトリップ体験がいろいろ紹介されてたわ。マリファナを吸うと、世界が愛すべきものに思えてくるんですって。

太陽も空も風も緑の木々、それに、普段はまったく無関心な街を歩き交

う人々や街そのもの、要するにこの世に存在している全てのものを抱きしめたくなるのよ。

マタビみたいだ。

娘 まあ似たようなものね。

映画の登場人物は、始めから最後まで、みんな笑いあっているの。空や木までが笑いかけているのよ。そして、周囲の全てがお互いに親しい感じになって、声をかけあうの。

「おはよう！」「元気かい！」って。

娘 なに、それ。教育映画みたい。あそこ、ポルノ映画館じゃなかったっけ。宗旨変えたのよ。環境問題としても、マリファナの大量生産を、勧めていたわ。石油や原子力にかわる燃料に使うんですって。

探偵 いいだもこは、どこに出てくるんだよ。

女 トリップ体験の復元場面になるとてくるのよ。さわやかな笑顔で。

探偵 信じられる？（と、娘の顔をみる）

女 じゃ、観てみたら？ 明日までよ。

探偵 教育映画だろ。

女 嫌いなもの？

探偵 まあね。

娘 ねえ…

女 まあね。

娘 ちよつと、脱線してない？

女 いやだ。どこからだっけ？

娘 映画観るのやめたところから。

そう、結局観るのやめて、そのあと二四時間営業のコンビニエンスストアに入って、約八分。出てきたあなたは両手に大きなビニール袋を一つずつ持って、おまけに12個入りのトイレ

娘　　ツトペーパーを…  
娘　　それ、あたしよ。昨日はこいつのコー  
ト着て買物に行ったんだ。  
女　　ちがうわ、こんなチビじゃなかった  
もの。  
娘　　チビで悪かったね。  
女　　行く手は袋小路。ぼやけたネオンサ  
インはホテル・リグレット。  
探偵　　隣の連れ込みホテルじゃないか。  
女　　そうよ。あなたはホテルの隣のうす  
よごれたビルの外階段を登る。剥き  
出しの螺旋階段をコツコツと、二階、  
三階、四階…　そして中に消え、し  
ばらくののち、右側の窓のあかりが  
灯り、帽子を取った、ぼさぼさ頭の  
シルエットが浮かび上がる。どう？  
娘　　よくある。パターンの探偵小説みたい。  
探偵　　としたら、もうそろそろ拳銃を持っ  
た男の登場だな。  
女　　茶化さないで。  
探偵　　なんの為にあなたをつけなきやいけ  
ないんですか、僕が。  
女　　夫に頼まれたんでしょ。  
探偵　　ご主人に？  
女　　夫は帰ってこないのよ。もう一年近  
く。  
探偵　　そりゃ、大変だ。  
娘　　失踪したの？  
探偵　　事件じゃないか。  
女　　女の所に行ってるのよ。  
探偵　　女か。  
女　　だと思っわ。  
探偵　　あれ、知らないんですか？  
女　　ある日突然いなくなったの。警察に  
も届けたわ。そんなケースは五万とあ  
るんですって。つまり、突然、煙草を

買いに行ったり散髪に行ったり帰ってこない夫を待っているみじめな妻っていうのは。

探偵 わかった！ つまりあなたは、失踪した旦那さんを捜すためにここへやってきたんだ。何も遠慮することはないんですよ。恥ずかしくすることもね。それこそ僕の仕事だ。お捜ししますよ。捜す？ あなたが夫を捜す？ なに

言ってるのよ！ あなたは夫に頼まれて、私を監視していたんでしょ！

探偵 違ったら！

女 すっとぼけて。

探偵 どう言ったらわかるんだよ！

女 いいわ。今日はこれで帰ります。でもいい？ 今度つけてきたら、警察につき出すわよ。

探偵 ああ、結構ですね。警察でも保健所でも。

娘 保健所はいやだ！

女 失礼。(と、出ていく)

娘 あ、忘れもの！(とサラダオイルを持って、追いかけてようとするが間に合わない) …

探偵 なんだい、こりゃ。(サラダオイルの缶を見て)事務所燃やすつもりだったのか。

娘 でも…

探偵 自意識過剰だよ。どこにでもああいうのがいる。気にすることはないさ。

娘 … あの人…

探偵 なんだ。

娘 似てない？

探偵 誰に。

娘 (壁に飾った絵を見る)  
うそだろ。

探偵

娘 だって、ほら、このほくろ。あの  
人にも同じ所にあったよ。

探偵 違うよ。

娘 そう？

探偵 … うん。

娘 ごめん。気にしなくたっていいからさ。  
探偵 … 思い出せないんだ。あの頃のこと  
が。ぼっかりと空白になって、考えれ  
ば考えるほど分からなくなる。

時々、同じ夢を見るんだ。

僕は、どこか知らない駅にいる。誰  
もいない。夜だ。ふと見ると、向かい  
のホームに女が一人立っている。暗く  
て顔が見えない。でも、彼女なんだ。  
彼女は誰かを捜している。

「ここだ！ こっちを見て！」

僕は声を限りに叫ぶ。だが、彼女は  
気がつかない。  
やがて、向かいのホームに列車が入っ  
て来る。

「待ってくれ！ 行かないでくれ！」

でも、彼女は、その列車に乗って、  
どこかに行ってしまうんだ。

やがて、僕の前にも列車が止まる。  
僕はその列車に乗らなければならな  
い。

彼女と反対の方向へ、永遠に到着でき  
ない旅に出るために。列車のドアが開  
く。

「いやだ！」僕は叫ぶ。

「乗りたくない！」

そして、そこで目が覚める。その繰  
り返しだ。

娘 疲れてるんだよ。

探偵 鍵を閉めてきてくれ。ブラインドを  
下ろして… 頭が痛くなってきた。

(と、頭を抱える)

娘 またいつもの頭痛？

探偵 だめだ。脳味噌がシャウトしている。

娘 (探偵の肩を抱いて) 目を閉じて、  
けいな事、考えちゃだめ。

音楽入る。娘が子守歌を澄んだ声で  
やさしく歌う。

夢案内ねこは

夢のなか

夜になったらやってくる

シュリシュリミャーオの

秘密の時間

愛はいかが

愛はいかが

一つちようだい あの人の愛

夢案内ねこは

ポケットに

しあわせ気分しのばせて

シュリシュリミャーオは

秘密のサイン

愛はいかが

愛はいかが

一つちようだい あの人の愛

一つちようだい あの人の愛

歌声が聞こえるなか、ブラインドが  
下り、探偵社暗くなる。

2 路地裏

路地裏に小さな明かりが入る。  
黒いマントにルンペン帽の老人が、  
小さな紙袋を手に、ホテルの石段の  
前に座っている。かたわらには、大  
きなトランクと鳥かご。  
さっきの女が、ビルの陰からふらり  
とやって来る。

老人 悲しそうだ。

女 誰？

老人 小鳥のようにたよりなげだ。何かを  
なくしたな。

女 なくしてなんかないわ。

老人 何かを捜しにきたか。

女 …… いいえ。

老人 こっちへおいで。

女、老人のそばに行く。

女 占いの？ 悪いけど、私、占いなん  
か信じてないのよ。

老人 こうやって座っていると、いろいろな  
人生を見ることが出来る。このホテ  
ル・リグレットにやって来る二人連れ、  
男と女、女と女、男と男。あの古ぼけ  
たビルの住人たち、みんな何かを捜し  
ている。歩いてきた道のりで落として  
きたものを思い続け、引き返すことも  
出来ず、ただ歩く。右へ行くことも、  
左へ行くことも可能だ。だが、後戻り  
だけは出来ない。落としてきた物は、  
通り過ぎた小さな駅の、名もない遺失



物係が、預かっているはずだ。しかし、誰も確かめることは出来ない。人々は戻ることを諦めて、次の駅で、それとよく似たかわりの物を捜してみる。好みのやつが見つかれば幸せだ。だが、所詮それは、他人が落とした物だ。たいていは身に合わない。それでもがまんして身につけようとする。すきま風をふせぐためにな。そうやって人は生きていく。

女 さむいわ。

老人 いっしよに温まろう。(と、紙袋からなにか取り出す)

女 あら、焼芋！

老人 うまいぞ。(と、渡す)

女 ありがとう： (老人のトランクを見て) おじいさん、旅行なの？

老人 そう、長い旅だ。もう、かれこれ五十年になる。

女 そんなに長い間？

老人 こいつを引っ提げてな。

女 鳥かご？

老人 手品の道具さ。

女 鳥がいないわ。

老人 昨日、最後の鳥を消した。

女 消した？

老人 手品でな。

女 消えたまま？

老人 そうさ。

女 どうして呼び返さないの？

老人 鳥たちが帰りがらないのさ。どの

鳥も、戻ってきたためしがない。

女 どこへ行っちゃったのかしら。

老人 さあな。よほど、いいところなんだろうさ。

実は言うのと、私は、そいつらを捜す

旅をしているんだ。ずっとね。

女 見つからないのね。

老人 ま、いつか見つかる。当分の間は、

こいつを売って、食いぶちを稼ごう。

(と、トランクを開ける)

女 (かごに耳をつけて) …音がするわ。

いろんな音が…夜の音。星の声。木

のささやき。風がハーモニカを吹いて

いる…

老人 今まで行った場所だ。ついこの間まで

は、森のなかで暮らしていた。

秋の森は素晴らしいぞ。夜には満天

の星空。枯れ葉は、一流ホテルのベッ

ドにも負けない寝心地の良さだ。食べ

物だっていっぱいあった。ヤマブドウ、

茸、栗、ハシバミの実。しかし、いさ

さか寒くなってきたのでな。

女 (かごに耳をつけたまま) 街のざわめ

き。列車が走って行くわ…どこに行

くのかしら? このかごの中から、鳥

たちは永遠を見つけて、飛び立ってい

ったのね。

(トランクのなかを見て) ずいぶんた

くさんの本…

老人 たいした本じゃない。だが、一冊売れ

ば、何日か暮らせる。

女 私も何か売ろうかしら。お金が無

くなったの。

老人 売ろうと思えば何でも売れる時代だ

からな。さあ、私の今夜の宿はここ

だ。

女 あら、ここ、ラブホテルよ。一人じ

ゃ、入れてくれないわよ。

老人 そうかな。

女 一緒に泊まってあげましょうか。

老人 帰るところがないのか?

女 帰ってもしかたがないの。  
老人 旅は道づれだ。  
女 さむいの。  
老人 一緒に温まろう。

二人、ホテルに消える。暗転。

### 3 探偵社

探偵社のブラインドが上がり、一週間後の朝である。探偵、机に両足を上げて居眠りをしている。娘が、その前を行ったり来たりしながら、ノートを読んでいる。

娘 「不思議な猫のお話、その1。桜の木になった猫。(探偵の顔を見て) …ねえ、聞いている？

探偵 ガオー(と、鼾のまね)

娘 ねえ!

探偵 うるさいなあ。聞いているよ。

娘 あるところに、タキという名の猫がいました。もとは飼い猫だったのですが、捨てられて、今は野良猫です。

タキは、公園の桜の木の下で、お昼寝するのが、大好きでした。

春は花びらのおふとんで、夏は緑の葉陰で、秋は色づいた木の葉に埋もれて、そして冬は、枝を通して差し込むお日様に抱かれて、タキはお昼寝します。そして心から思います。

『あたしだけの桜の木がほしいな』

探偵

私有財産は革命の敵だぞ。

娘

(無視して) するとどうでしょう!

タキの背中に、ぼちちりと小さな桜の芽が出てきたのです。芽はぐんぐん大きくなって、やがて葉をつけ、枝わかれをしながら、すくすく伸びていきました。タキは大喜びです。

探偵

背中に、何だって?

娘

芽が出たんだよ! 水をやり、といつても、雨の中にじつと立っているだけでしたが、光を浴びて、これもお日様の下で、じつとしていただけでしたが、背中の木を、大切に育てました。して、ある春の日のこと。

花びらに埋もれながら、タキは自分の足が、四本の硬い幹になって、土のなかにしっかりと根を下ろしているのに気がついたのです。

探偵

け、背中に木を繁らせた猫なんて、どう、イメージすりゃいいんだよ。

娘

なりたかった桜の木になったタキは、それからその場所に立ち続けて、たくさんの猫たちのお昼寝を見守っているということですよ。おしまい。」

どう、おもしろい? あたしのつくったお話。

探偵

涙が出るほど傑作だよ。

娘

やっぱ、あたしは、才能があるんだ。

探偵

冗談も通じないぜ。

娘

知ってる? インディアンの伝説にあるんだってさ。世の中の役にたつことをすれば、生まれ変わって、木になれるんだって。

あたしも何かいいこととして、木になって、長生きするんだ。

探偵 殊勝な心掛けですがね、今だって、二十年近く生きてるじゃないか。もうばあさんもいいとこだぜ。

娘 木は何百年だよ。

探偵 そんなに生きてたら飽きちゃうぞ。

娘 飽きない。生きるって楽しいもん。

探偵 (おおあくびをする)

娘 なんだよ。まだ眠いのかよ。何時間寝たら気がすむんだよ。

探偵 はてしなく寝てたいよ。今日の予定は？

娘 家出猫の搜索に、毒殺されたダックスフンドの犯人捜し。夜はフラミンゴクラブのパーティに出席。

探偵 うんざりだ。

娘 家出猫は、右目がブルーで左目が金色の時価百万円っていうアメリカンショートヘアの珍種で、飼い主は、見つけた人に一割の謝礼を送るってさ。でも、これはもうあたしが見つけた。どこで？

娘 隣のホテルで、虎猫と浮気してた。とっつかまえて、ドアの所につないであるよ。

探偵 やったぜ。十万だ。

娘 毒殺されたダックスフンドの件だけでなく、犬の胃袋からは、青酸カリ入りの胡桃パンが見つかっている。

この胡桃パンは、駅前のコロコロベーカーリーでしか作られてないんだ。で、聞き込みの結果、あやしい人物が浮かび上がった。年令不詳。ぼさぼさ頭。(と、探偵を見る)

探偵 冗談じゃないぜ！胡桃パンだつて？

昨日買って、さっき食ったぞ！

一瞬、二人、顔を見あわる。

娘 (探偵の口をこじ開けて、匂いを嗅

ぐ) やばい！ 青酸の匂いだ！

探偵 …… う…

娘 吐け！ 吐け！

探偵 ばか！ なにすんだよ！ く、くる

しい… (と、口をこじ開けられているので、何を言っているのかわからないが、こんな意味のことを言っているらしい)

しばらく二人で葛藤。探偵、ぐたつとなる。

娘 死、死んじやった… 死んじやった

… フータローが死んじやった…

間。娘、手を離して、泣きじゃくると、探偵、むっくり起き上がる。

探偵 …… 死んでないぞ…

娘 (茫然と) …… なんともないの？

探偵 うん。

娘 よかったあ。(と、抱きつく)

探偵 一体、どうなってるんだよ。

娘 …… 読めたぞ。

探偵 なにが？

娘 コロコロベーカーリーの親父は、はじめから計画してあんたを殺すつもりだったんだ。

探偵　なんだって？

娘　そのパンが売り出されたのは昨日だけ。それも、たった二つしか作られてないんだ。その二つをあんたが買って、一つを帰る途中で落としてしまい、それを通りかかったダックスフンドが拾って食べた。

探偵　どうして僕が殺されなきゃならないんだよ。

娘　あんたに秘密を握られたと思ったんだ。

娘　ほら、あんた、おとつい、あの親父に「ピロシキはないかな？」って、聞いたろ？

探偵　うん。  
娘　それだ。

娘　「ピロシキはないかな？」それが、命取りだったんだ。あの親父は、三十年前、アメリカ大使館の料理番をしていた時に、ピロシキの中に毒を盛って、ソ連から来たお客を殺したんだ。それを嗅ぎつけられたと思った。

探偵　スパイだったのか！

娘　ううん、別に政治的な理由じゃないんだ。

探偵　じゃ、どうして、その客を殺したんだ。

娘　そいつが親父の自慢の料理を食べなかつたからさ。ピロシキしかいらな  
いと云ったんだ。親父はプライドを傷つけられ、犯行に及んだ。

探偵　ねえ、その事件をネタに親父を恐喝しようか？

探偵　三十年前じゃ、もう時効だよ。それに、ソビエト連邦は消滅したんだ。義理立てすることはないさ。

娘 だったら、あんたの殺人未遂ってこ

とで二十万、親父から口止め料をふ  
んだくろう。プラス、ダックスフン  
ドの香典十万。これで、事件のモミ  
消し工作をする。

探偵 香典五万にして、半分、僕の小遣い

にしてくれよ。殺されかかったんだ  
から。

娘 香典は十万！ じゃないと依頼主を

説き伏せられない。

でも、青酸カリ入りのパン食べて、  
なんで死なないの？

探偵 …

娘 フラミンゴクラブは…

探偵 もういいよ。ろくな仕事がないな。

(と、机の引き出しから、やりかけ  
のジグソーパズルを取り出してやり  
始める)

娘 このビルが悪いんだ。変な会社や事

務所ばかり入ってて、普通の人は寄  
りつかないよ。

探偵 調べたのか。

娘 隣はアダルトビデオ会社の倉庫。こ  
の間までは、しょっちゅう、警察が  
出入りしてた。

探偵 しめた！ 夜中に忍び込んで、ちょ

っと拝借…

娘 でも、今は、教育映画に宗旨変えし  
て、すっかりおとなしくなってる。

探偵 またか。流行ってるのかよ。その、

ポルノから教育映画ってやつが。

娘 下は、わけのわからない通信販売の会  
社と家政婦紹介所。

… そうだ。ねえ、覚えてる？ ほ  
ら、一週間ほど前に来た女の人。あの、  
あんたにつけられてるって、サラダオ



イル持って乗り込んで来た…

探偵

ああ。

娘 あの人、そこに入っていくの見たよ。

よ。

探偵 そこって… その、家政婦…

娘 (うなづく)

探偵 働いてるのか。

娘 そうでしょ。でも、あそこ、変なう

わさがあるんだよ。

探偵 どんな。

娘 家政婦は隠れ蓑で、実は、売春組織

じゃないかって。

探偵 本当か。

娘 クリーンレディカンパニーっていう

のが、その正式な名前だね。この間

チラシを拾ったんだけど…(と、ノー

トを繰り返して、挟んであったチラシを取

り出す)これだ… 「にこにこレディ

の出張サービス。当方に登録している

る、容姿端麗にして、心優しき主婦あ

るいは律儀な女子大生が、お客様のご

家庭を訪問し、出張サービスを致しま

す。掃除、洗濯、マッサージ、ねたき

りの御老人のお相手から、目の離せな

いいたずらっ子のお相手まで、すべて

お任せ。クリーンレディカンパニー」

ね、おかしくない？

探偵 どこが。まっとうな訪問サービスじ

やないか。

娘 フーターだったら、全然、観察力が

ないんだな。おそうじおばさんに、ど

うして、容姿端麗が必要なんだよ。

もっぱら、独身男性相手の訪問サー

ビスだって、うわさだよ。妻帯者には

ホテルへの出張サービスもしてると

てさ。

探偵

…

娘 (壁の絵を見て) なんか、気になるな。

と、来客を知らせるベルが鳴る。

娘

仕事、仕事。

ドアを開けると、そこに、女が立っている。前とは見違えるほどに、派手な感じ。女、にこやかに笑って入ってくる。

女

おはよう。

娘

… おはよう。

女 この間は、お騒がせしちゃってごめんなさい。

探偵と娘、顔を見合わせる。

女

今日は、ちよつと込み入った相談があつて来たの。

(娘に) 席、外してくれる？

娘、首をすくめて、奥に消える。

探偵

相談って、なんですか。奥さん。

女

奥さんはやめて。私、もう、奥さんじゃないのよ。

探偵

というと？

女

待つのが嫌になったの。

探偵

よくわからないな。待つのが嫌になったら、奥さんじゃなくなるんですか。

女 結婚は鳥かごのようなものだって、誰かが言ってた。

かごの中に自分を閉じ込めている限りにおいては、私も、いごちのいい自由を、手に入れることができたわ。生活なんてしちめんどくさい事は、夫がしてくれた。男って、すすんで召使の役をしたがるのね。召使の役、つまり、働くことよ。

探偵 私はまっぴら。誰か、やさしくて面倒見のいい男をだまらかして、楽をしようよ、その為に結婚したんですもの。

探偵 そんな女と結婚した男こそ、いい迷惑だな。

女 その通りよ。虫のいい話。

つまり、その頃の私は、世界の荒波に一人で立ち向かっていく、勇気も自信もなかったってことね。

探偵 気がついただけ、まだ、救いがあるってもんだ。

ある日、私はレンタルビデオ屋で借りた映画を見ていたの。「マドンナのスーザンを探して」っていうやつ。平凡な主婦が、奇妙な新聞広告に興味を持ったことから事件に巻き込まれていくのだけれど、その新聞広告っていうのが奮ってるのよ。

「必死でスーザンを探してる」というの。みんな必死で生きてるのよ。私も必死で生きてみたい。

かごの外を見てみたい…でも、そう思った時、なぜか、夫の方が家を出て行ってしまったの。

探偵 出ていった？

女 ええ。

探偵 連絡は？  
女 ぷつぷり。私は待ったわ。何日も、何週間も。  
探偵 やはり捜した方がいいんじゃないかな。  
女 いいの。  
探偵 今日は、そんなことで来たんじゃないんだから。  
探偵 じゃ、なんなんですか？  
女 なんだと思う？  
探偵 悪いけどあなたと遊んでいる暇はないんですよ。  
女 あら、私もよ。今日から働くの。  
探偵 下の家政婦派遣会社ですか。  
女 よく御存知。さすが探偵さんね。この間、登録しておいたら、連絡がきたのよ。  
探偵 ……  
女 ね、どう、このドレス？（と、スカートを摘んで回って見せる）  
探偵 いいですね。  
女 高かったのよ。キャッシュカードに残っていた最後の貯金を下ろして買ったわ。このバックと靴もね。  
探偵 家政婦にそんな服が必要だとは思わないけどな。  
女 関係ないでしょ。あなたに。  
探偵 分かっているんですか。どんな仕事か。  
女 家政婦のこと？ お掃除、お洗濯、お料理、エトセトラ…。いってみれば、奥さんのかわりよ。  
探偵 奥さんの代わりにすることは、それだけじゃないと思うけど。  
女 ええ、他にもいろいろね。  
探偵 知ってるのか。君は知ってて…  
女 もちろんよ。ただのお手伝

いが、こんなにたくさんさんのギャラン  
ティを約束してくれると思うほど世  
間知らずじゃないわよ。

いくらだと思う？ 一日三万円よ。  
もつとも、探偵さんの調査料も、その  
くらいだって聞いたけど、どう？

探偵 まあね。

女 そこでお願いなんだけど。

探偵 なんです。

女 あなたに捜して貰いたい人がいる  
のよ。

探偵 旦那さんじゃなくて？

女 ええ、別の人。

夫を待つことが日常になりはじめた  
頃、私は一通の手紙を受け取ったの。

消印は十八年前。どうしてそんなに  
も届くのが遅れたのかは、わからない。  
でも以前、二十年前に出された手紙を  
受け取った人の話を聞いたことがあ  
る。その手紙は、なにかの手違いで、  
どこかの郵便局の集配室の棚の上で  
二十年間、眠っていたのですって。  
だから、そんなこともあるのかもしれ  
ないわ。おまけに宛名は旧姓で、実家  
にあてて書かれたものだから、余計に  
てまどったのかもしれない。

私は差出人の名前を見た。

差出人は、野放風太郎とあった。

(突然、奥のドアを開けて顔を出す)

あああ！！

探偵 (引っ込んでろ！ というゼスチャ

↓)

女 (二人を見て) … なにか？

探偵 いえ。

女 野放風太郎… 懐かしい名前。十八  
年前、私達はつきあっていたの。

…いいえ、そういう言い方は正しくないわね。私はその人と、ただ手紙のやりとりをしていただけだったんですもの。

私達は、高校生。私は昼間の高校で、その人は夜間の生徒だった。同じ学校の、でも、昼と夜で、私達は顔を合わせることもなかったわ。

では、どうしても、知り合ったのかって？

きっかけはね、偶然だったの。

私が忘れて帰ったチャンドラーの探偵小説を、夜の教室で、同じ席に座っていたその人が読んで…

探偵 「長いお別れ」か。

女 あら、そうよ！… どうして知ってるの？

探偵 いや、チャンドラーって言ったからただそうじゃないかなって… 有名だから。

女 その通りよ。おもしろかったって、手紙が挟んであって、お礼に、今度は彼がシムノンのメグレシリーズの中から一冊を選んで貸してくれたの。そうやって、私達の文通がはじまった。

探偵 捜して欲しいのはその人なんです

女 か。  
ええ。

十八年ぶりに届いたその人の手紙には、ただ、遠い所にいるって、書いてあっただけだったわ。

探偵 消印は？

女 日付けだけは判ったけど、場所は読み取れなかったの。消印のその箇所は、雨に濡れたみたいに、滲んで

いたから。

探偵 手紙は、それきりですか。

女 いいえ。不思議なことって、続けるね。驚いたことに、しばらくたって、また彼からの手紙が来たの。日付は十七年前。場所はやはりわからない。

それから次から次へと、届くたびに新しい日付になって、去年の日付の手紙が届いたのが、一週間前。ほら、私が、ここに来た日よ。

探偵 顔は。

女 顔？

探偵 彼の顔です。

女 知らないわ。だって、逢ったことがないんですもの。

探偵 だめだな。

女 どうして。

探偵 そんなんじや、捜しようがない。

女 一日三万円払うわよ。

探偵 そのために、男と寝るってわけか。

女 何をしようと私の勝手でしょ！

探偵 断る。

女 どうして。何日かかったっていいのよ。いい仕事じゃない。

探偵 不毛だよ。

女 なぜ。

探偵 見つかる見込みもない相手を捜すなんて、僕は、それほど、暇じゃないんだ。

女 ほかにお客がいるようには見えないけど。

探偵 ここには居なくても、依頼は一杯入っているんだ。忙しいんだ。

女 忙しいですって。あなたのいう忙しいって、子供だましのジグソーパズルをすることなの？（と、テーブルの上

の完成間近のパズルを崩す)

探偵

ああー！ もうちよつとで完成だったのに。三日もかかったんだぞ。

女

引き受ける？

娘

(奥から出てきて) もちろんお引受しますよ。大丈夫。任せてください。

わがソラミミ探偵社に不可能の文字はなし。

探偵

おい。

娘

(無視して) それで、その手紙は？

女

ここにあるわ。(と、バックの中から

ら手紙を取り出して、手紙を机の上にはら蒔く)

今朝取ってきたの。次の手紙が来てるんじゃないかと思ったけど、来てなかった。一週間ぶりで帰って見たら、ペランダの花が枯れていたわ。

娘

じゃ、あれから、ずっと、帰ってなかったの？

女

まあね。おじいちゃんと一緒に、隣のホテルに泊まっていたのよ。

娘

おじいちゃん？

あのあと、ここを出てから知り合っただの。

娘

もしかして、路地裏で本を売ってる人のこと？

女

そうよ。あれは、おじいちゃんが若い頃に書いた本なの。読ませてもらったけど、傑作よ。売れなかったなんて信じられないくらい。きつと、売ろうとしなかったのよ。

だからね、私も協力してあげようと思っただけ。ほら、(と、かばんから本を出して) 今日行くお客さんにも買ってもらうの。きつと、おじいちゃんも喜んでくれるわ。



探偵 からだを売って、そのついでに、本も買ってもらおうっていうのか。

女 なにがいいいの？

探偵 そんなのは自己満足にすぎないんだよ。あんたは生きてるって証拠が欲しいだけなんだ。必死で生きてるって証拠がね。おじいちゃんが喜んでくれるだって？ うぬぼれるな！ 身体でもなんでも売ればいいんだ！ ふしだらだよ！ あんたには、モラルってもんがないのか！

女 ほっといてよ！ いちいちあなたに言われることはないわね。モラルですって？ モラルなんて、とっくの昔に公衆トイレに捨てて来たわよ！

探偵 汚いよ！（頭を抱える）

娘 （女に）この人、頭痛持ちなの。時々イライラして、こんな風になるんだ。気にしないで。

女 かわいそうに…（壁の肖像画を見て）きれいな人。世の中の汚いものは何も知らないって目をしている…帰るわ。

娘、女を入口まで送って行って、外を覗く。

娘 あれ、猫がない。

女 猫って、白い？

娘 うん。

女 それならさっき、逃がしてやったわ。そんなあ！

女 下で待っていた虎猫と、連れ立って出ていった。人の恋路をじゃましちゃいけないわね。

娘 くそ！ 十万ばあだ。

女 じゃ、お願いね。  
娘 調査料、高いよ。  
女 結構よ。

女、出ていく。

娘 結構よ、か。(探偵に) ねえ、どうするのさ。

探偵 …

娘 やっぱり、あの人じゃないか。この絵の人だろ。似てないのは、顔を知らなかったからだね。ほくろは、手紙のやり取りで聞いてたんだ。ね、そうだろ？ どうしてあんなに怒ったのさ？

探偵 うるさい！ だまってる！

娘 … だって…

娘 ねえ…

探偵 …

娘 あたし、散歩に行ってくる。

娘、しょんぼりと出ていく。

探偵 …

… 夢のつづきだ。どこか知らない街で人を待っているのに誰もこない。待ちつづけることにたえられなくなった僕は、細い路地裏から出口を捜す。でも、見つからない。

夢の場所も人も、目をつぶればはっきりと見えるのに、目を開ければどこかに消えている。

そんな時、僕は、迷子になった子供のように泣いているんだ…

探偵、机の上に散らばっている手紙

の中から、一通を取り上げると、読み始める。

探偵

なつかしいミト。

顔も知らないのに、なつかしいなんて変だね。でも、僕は、毎日毎日、君の顔を想像している。

今日は僕の飼っているねこの話をするね。

生まれたばかりの灰色の小さなね

こで、僕が学校から帰ってくると、アパートの入口で鳴いていたんだ。

そうか、このことは、前にも書いたよね。

でも、それからのことは知らないだろ？ あれから一年。そいつは今でも僕のそばにいるんだ。

昨日、やっとそいつに名前をつけた。タキ。知ってるかい？ チャンドラーの飼っていたねこの名前さ。チャンドラーのタキは、二十才近くまで生きて大往生をしたそうさ。僕のタキは、幾つまで生きるだろうね。

（読むのをやめて、入口に目を向けると）… タキ…

暗転

4 路地裏

娘がビルの外階段に座って、ノートを読んでいる。老人が、ホテルの石段に座って聞いている。傍らのトランクの上には、何冊かの本が積まれている。夕暮れ時である。

娘 「不思議な猫のお話、その二。おしやべりを食べる猫。

老人 おしやべりを食べるだつて？ 珍しい猫だな。

娘 そうさ。タキは、特別な猫なんだ。  
老人 ほう。

娘 (読む) あるところに、タキという名の猫がいました。もとは飼い猫だったのですが、捨てられて、今は野良猫です。

タキは、おしやべりを食べるのが大好きでした。

老人 どんな味なんだ？

娘 うん？

老人 おしやべりさ。

娘 いろいろさ。人によつて、違うんだ。  
老人 たとえば？

娘 お腹のすいている時は、元気な男の子のおしやべり。その後で、口直しに可愛い女の子のおしやべりを食べる。食後のデザートって感じかな。

老人 一番おいしいのは何かな。

娘 うーん。ま、あたしの好みから言う  
と、年寄りのおしやべりだな。だつて、あじのひものみたいだもん。

老人 いいぞ。

娘 (読む) そんなわけで、タキは、街中を歩き回って、いろんな人のおしやべりを食べていたんです。

食べられた人はどうなるのかって言う  
と、ただ、自分のしゃべったことを忘れてしまうだけです。ですから、別に、タキは悪いことをしているわけではないのです。

老人 ま、理屈としちゃ、そうだな。

娘 もちろん、失敗もします。

恋人達の約束を食べてしまって、けんかをさせてしまったり、おばあさんのひとりごとを食べてしまって、『近頃、どうも、もの忘れがひどくなった』と、悲しませてしまったり。

老人　そりゃ、可愛そうだ。

娘　でも、いいことだってあります。悪口や別れ話を食べてあげると喜ばれます。誰だって、いやなことは忘れてしまいたいですからね。

ただひとつ、困ったことは、おしゃべりを食べ過ぎて、太ってしまったっていうこと。ダイエットの、何かいい方法はないかな。

そこでタキは、なかよしのおじいさんに、食べてきたおしゃべりを分けてあげることにしたのです。

その結果、タキは十キロスマートになり、おじいさんは、十年若返りました。めでたしめでたし。おしまい」

老人　うん。新しい考え方だ。

娘　なにが？

老人　おしゃべりを食べる。発想の転換だ。でも、悪食はよくない。

娘　おなかをこわしちゃう。あたしがだめなのは、教訓とお説教。正義づらをしてるやつは、嫌いなんだ。

老人　お前のへそは曲がってるな。

娘　しっぽ曲がりだって、言われるよ。

老人　つむじ曲がりじゃないのか。

娘　つむじって、ないんだ。

老人　ないのか？

娘　（老人の持っている本を見て）それ

：

老人　これか？　これは、私の書いた本だ。  
娘　どんな本なの？

老人 満月にはかない恋をする男の話さ。  
豊満な満月に恋をした男は、遊園地の観覧車に乗って、月に逢いに行くんだ。

しかし、月は、夜毎に痩せ細り、やがては暗い闇のなかに消えてしまう。男は、絶望のどん底に落ち込む。が、それもしばしの間だ。

消えたと思った月は、少しずつ姿をあらわし、やがて、もとのあでやかな姿となって、男の前にあらわれる。男は、涙を流し、彼女を迎える。

娘 その男の人って、いったい何度繰り返すんだろうね。その、悲しんだり、喜んだりをさ。

老人 一生さ。一生、恋の苦しみや悩みやときめきを繰り返ししていく。

娘 いそがしいね。  
老人 恋とは、観覧車のゴンドラだ。上がったたり、下がったりを繰り返し返す。

娘 観覧車って言えばさ、ブラットベリの本で読んだことがある。

カーニバルと、黒い観覧車と、山高帽をかぶったクーガーさんっていうサーカス団の団長さんのお話。観覧車が反対に回ると、クーガーさんが、若くなっていくんだ。

こわいお話なんだけどさ。でも、そんな観覧車があったら、乗ってみたいと思わない？

老人 何のために？

娘 若くなつて、昔に戻れるんだよ。

老人 ごめんだね。お前は、戻りたいのか。  
娘 わからない。…でも、なつかしい感じがする。安心して、甘えていたよな。

老人 好きな人の膝の上でか。

娘 おじいさんは、あの人が好き？

老人 誰だ？

娘 あの女のやさ。一緒に住んでいる。

老人 あの子は、変えようとしているんだ。自分をな。鳥かこの鳥から、野原を飛び回る鳥にな。

娘 あの人の、身体を売っているの知ってる？

老人 そうか？ 私には、家政婦の仕事だと言ってたぞ。

娘 表向きはね。

老人 表も裏も、仕事は一緒さ。自分の時間と引換えにお金を手に入れるだけだ。

娘 あの子は、この本も売ってくれている。私は、まだ、一冊も売ってないが、あの子は、もう十冊も売ってくれた。

老人 もう、十人の男と寝たってことだ。

老人 何人と寝ようと、あの子の身体は、その血の一滴だって、清らかなままさ。

娘 どうして？

老人 私の本が、その肩代わりをしているからさ。

娘 どういうこと？

老人 これは、実は、私が書いたものではない。昔、私の友人が書いた小説なんだ。そいつが死んだんで、私が自分の名前で発表した。あの子は知らないがそうなんだ。

娘 あの子が、身体と一緒に、この本を売る。この本だけが恥辱にまみれる。もともとの美しいものは、そのままだ。変な理屈。でも、買った人は、こんな本なんか誰も読まないんじゃない？

老人 捨てられる運命だ。人に捨てられる  
ために売る。私に似合ってる。  
娘 そうやって、自分を責めているんだ  
ね。  
老人 なあに、自分じゃ捨てられないだけ  
さ。恋と同じだ。  
娘 恋か。  
老人 お前は、あの探偵が好きか？  
娘 好きだけど… いいんだ、あたしは  
人 どうして。  
娘 … あたしは、あいつとは一緒にな  
れないんだよ。お月さんに恋した男み  
たいにさ。  
ね、その本、難しい？  
老人 誰にでも読める。  
娘 あたしに貸してくれる？  
老人 慎んで、進呈しよう。  
娘 (本を受け取って) ありがとう…  
老人 「センチメンタルな月の直径」か。  
娘 題は私がつけた。  
老人 それじゃ、半分はおじいさんの作品  
だよ。題は、小説の顔って、いうじゃ  
ない。  
老人 なかなか優しいことを言うな。  
娘 優しいかないよ。… あたし… 猫だ  
もん。  
老人 ン？  
娘 あたし、猫なんだ。永遠に人間にな  
れない…  
老人 猫か…  
昔、ボードレールという詩人が言っ  
ておったぞ。  
「猫の目のなかには、時がある」と  
な。おまえの目は、あの星と同じだ。  
娘 星？(と、空を見上げる)  
老人 ああやって、星は、何千年も同じ場



所で輝いている。

星は、ファンタジーだ。目を開けたまま見る夢だ。

常識とか理性で、がんじがらめになつている大人達にさえ、それを忘れさせる力がある。

ここにいる我々だってそうだ。

星の方から見れば、我々だって、ひとつの夢のかげらにすぎないのかもしれない。

たとえば、現実ここにいると思つているのは自分だけで、それは、ひよつとして、誰かに夢見られている存在にすぎないのかもしれない。だが、誰かの夢の中だけで生きていたとして、それが、現実に存在する人間よりも、実体のないものだど、どうして言える？ 誰かの強い意思の中で存在すれば、それは、死をも乗り越えられる。

娘 どういう意味？

老人 わからないか？

娘 死んだあとも、誰かの心のなかで生きていれば、それは、現実に生きているのと同じってこと？

老人 まあ、そうだ。

死を越えて、愛がある。結びつくのは、肉体も魂も同じだ。

娘 … あいつ、変なんだ。何か、思い出せないものがあつて、そのために、変になつてる。あたしたちが、一緒にあつちこつちを転々と移っていく前に何かあつたんだ。そのことが、あいつを変にしている。

老人 なぞを解くカギは、すぐそばにある。

娘 おじいさんは、これからはずっと、このホテルにいるの？

老人 さあな。  
娘 家はないの？  
老人 今いる所が、家さ。  
娘 家族は？  
老人 今一緒にいる人が家族だ。  
娘 あたしと同じ。  
老人 なかよくしよう。  
娘 うん。…（空を見上げて）あ、流れ星だ。

音楽入る。娘の歌が流れる。

ティンクルスター  
流れ星

踊る銀のトウシューズ

あたしの願いをかなえて

ティンクルスター

広い星空に

夢をはこぶムーンレディ

わすれた時間をとどけて

ティンクルスター

あの人に

そつと歌ってラブソング

あたしの思いをつたえて

ティンクルスター

ティンクルスター

娘の歌が流れるなか、探偵社に小さな明かりが灯り、探偵が、空を眺めている。路地裏、だんだんと暗くなる。

突然、大きな音をたててドアが開き、  
女が飛び込んでくる。かなり乱れた  
服装。

探偵

どうしたんです！

女

シート（と、指を唇に当てて、閉めた  
ドアに耳を寄せている）

間

女

行ったわ。

探偵

誰が？

女

嫌な奴！

探偵

一体…（と、女の乱れた服を見る）

女

（ブラウスをかきあわせながら）な  
んでもないの。

探偵

なんでもないって…

女

…

探偵、自分のカーディガンを脱いで  
女に着せかける。女がカーディガンを  
着ている間に、隣の部屋からコーヒー  
の入ったポットとカップを二つ、持っ  
てくる。

探偵

そんな仕事は止めた方がいいな。

女

お説教なら聞きたくないわ。

探偵

じゃ、どうして、ここに来るんだ！

女 事務所に逃げこむつもりだ

ったのよ。

探偵 下の？

女 そう、間違えたの。文句ある？

探偵 … 別に。

女 さ、帰るわ。ご迷惑をおかけしたわね。(と、出ていこうとする)

探偵 (引き止める)

女 なによ。

探偵 まだ外にいるかもしれない。

女 本当に？

探偵 (頷く)

女 もう少し、居ようかしら。

探偵 その方がいい。

探偵、カップにコーヒーを入れて、  
女にすすめる。

女 ありがと。… (あたりを見回して)

相変わらず、汚いのね。掃除したこと  
あるの？

探偵 さあ。

女 この前の女の子は？

探偵 あいつ、掃除は嫌いなんだ。

女 片づけてあげましょうか？

探偵 いいよ。僕は一日三万円も出せない  
からね。

女 それ、皮肉？

探偵 別に。

女 ところで、調査は進んでる？

探偵 何の調査。

女 いやだ。この前、頼んだでしょ。

探偵 あれなら、もう調査の必要はないよ。

女 どういう意味？

探偵 わかったんだ。

女 何が？

探偵 ああなたの捜している人が、どこにいるか。

女 見つかったの？ どうして早く言うてくれないのよ。ねえ、彼、今どうしているの？

探偵 その前に、あれは、本当なのか？  
つまり、僕があなたをつけていたつて。おかしな人。どうしてしらばっくれるの？

探偵 違うんだ。本当に分らないんだよ。あれから考えたんだが、言われてみれば、確かに、あなたをつけていたよ。うな気もする。

時々、ぼっかりと記憶がなくなるころがあるんだ。自分が自分で分からなくなる。どこがおかしいんだ。

女 いやに悲観的ね。  
二日酔いや疲れが重なった、一時的なものかもしれないじゃない。

探偵 あなたから預かった手紙を全部読んでみた。十八年前からはじまって、最後の手紙の日付けは、去年の十二月。それには、やっと、あなたの住む所に近づいたとあった。

女 その頃からよ。私がいっつも、背後に誰かの影を感じるようになったのは。私が行くところ、いっつも、誰かが後をつけてきているような。

探偵 例えば、喫茶店の一つ離れた席から誰かの視線を感じていたとか？

女 ええ。  
スーパーマーケットで買物をするああなたを、山積みになったビスケットの間にじっと見ていたり。

女 夕暮れの公園で、背中合わせのベンチに座っていた、あの黒縁眼鏡のセー

ルスマン。

探偵 ラッシュをすぎた駅の待合室で、あなたは何台もの電車をやり過ごしていた。

女 (探偵を見る)？

探偵 遊園地で、しつこくつきまといた、ゴリラのぬいぐるみを覚えてるかい？

女 …まさか…。

探偵 あなたはいつも一人だった。

女 …じゃあ、あれは、みんなあなた？

探偵

女 そう、僕だ。

女 でも、なぜ？

探偵 僕は捜してたんだ。あうことのなかった文通相手を。

女 文通相手ですって？

探偵 やつと、分かりかけてきた。

そう、僕は、あなたを捜していたんだ。ずっと、十八年間ずっと…

女 じゃあ、あなたが、野放風太郎だったというの？

探偵 そう…

女 でも、どうして今まで？

探偵 自分でも分からないんだ。まだ、頭のなかが、混乱している。

確かに僕は、野放風太郎だ。あの手紙を書いたのも僕だ。でも…

女 記憶がないのね？

探偵 待って… 待って。今、思い出すから、少しずつ… 手伝ってくれないか。

女 いいわ… さあ、はじめて。

探偵 … あなたの名は、美都。美しい都。いなか町の中学校から都会に出て

きた僕は、都会生活二年目で、もう一度勉強をし直そうと、夜間の高校に通

っていた。

ある時、ふと探った机の引き出しのなかに、誰かの忘れた本があった。チャンドラーのロング・グットバイ。昼間の学生だったあなたの忘れもの。読み終わったあと、僕は手紙を書いた。そして、お礼にって、貸してくれたわ。シムノンのメグレシリーズの一冊を。

探偵 それが二人のはじまりだった。

女 それから、次から次へ。

探偵 モーリス・ルブラン、ガストン・ルー。

女 ボアロ&ナルスジャック、フレッド・カサック、チェスタートン

探偵 クイーン、カー、クリステイ。

机のなかに、本に挟んだ手紙を入れて。

女 私たちは、いろんな事を教えあつた。趣味は？ 好きな食べ物？ どんな部屋に住んでいるの？ 私のホクロの

位置から、あなの飼っている子猫の話まで。

探偵 そして一年。卒業式を前にして、僕たちは、初めて逢う約束をしたんだ。

女 場所は映画館。

探偵 映画の名は「フォロー・ミー」

女 一言も言葉を交わさない恋人たち

の ストーリー。私たちがみたいだった。

探偵 でも、僕たちは逢えなかった。

女 あなたが日にちを間違えたのよ。

探偵 いや、君だ。

女 あなたは土曜日。

探偵 君は日曜日。

女 一日違いの同じ時間、同じ場所で。

探偵 僕たちは、同じ映画を見た。

女 私たち、約束していたのよね。

探偵 映画館では、ポップコーンを食べよう  
つて。

女 ポップコーンは、希望がはじけた食  
物ですもの！

でも、あの時は、一人で、涙でしよ  
うばくなったポップコーンを食べなきゃ  
ならなかった。最低の気分。

探偵 僕だって。

女 でも、もちろん、二日のちには誤解  
は解けていたわ。

探偵 君が、日にちを間違えたせいだ。

女 いいえ、あなたよ。

探偵 そして、僕たちは、もう一度、逢う  
約束をしたんだ。

女 場所は、… ホテル。

探偵 そう、ホテルだ。

女 私は十七才なったばかり。

探偵 そして僕は二十才。

女 ホテルにしようって決めたのは私。  
それは、大きな冒険だった。

まだ一度も逢ったことのないあなた  
と逢うための。そしてそこで、愛し合  
うための。

探偵 僕たちは、まだ見ぬ相手にせつない  
ほどの恋をしていたんだ。

女 三月のはじめというのに、とても寒  
い日だった。私は待ったわ。ホテルの  
部屋で。

海辺の小さなホテルだった。すぐ近  
くに、遊園地があった。観覧車やメリ  
ーゴーランドやコーヒーカップが、恋  
人たちを乗せて回っていた。色とりど  
りの風船が、午後の空を飾り、陽気で



楽しいな歓声が聞こえていた。

でも、ホテルの名はリグレット。

探偵

リグレット…

出す。

隣のホテルのネオンサインが光り

女

そうよ。今、思い出した。ホテルの名はリグレット。悔恨という名のホテル。悲しげな色彩に彩られた部屋。

窓辺に立って、私は待った。午後から夕暮れになり、そして、観覧車に明かりが灯り、夜になった。でも、あなたは来なかった。雪が降り出していた

：

探偵 その頃、僕はオートバイを走らせていた。

美都、美都、美都に逢うんだ。高速道路を飛ばし、凍てついた道を湾岸線に入った。もうすぐだ！ 美都、美都。その時だった！

キーンと、車のブレーキ音。続いてガシャン！ とぶつかる音。探偵が、耳をおさえる。

間

女

… 事故？

探偵

… ガードレールに激突したんだ。

女

… 怪我は？

探偵

ひどかった。

女

それで、来られなかったのね。

探偵 行きたかった。君に逢いたかった。

女 私は待ったわ。あれ以来、ずっと待ってた。あなたの手紙を、あなたからの連絡を。

探偵 出来なかったんだ。

女 私は高校を卒業して、大学へ行って、一ダースほどの恋愛をして、結婚をした。そのうち、あなたのことは、だんだんと忘れていった…

探偵 そう、君は忘れてしまっていたんだ。僕のことを。

長い間、僕の手紙が君の所に着かなかったのは、君が、僕のことを忘れていたからだ。

でも、僕は忘れていなかった。

僕は君に手紙を書き続けていた。あの時以来、僕が行かざるを得なかった遙か遠い所から、僕は君に手紙を書き続けていた。

女 ……どうということ？

行かざるを得なかった遙か遠い所つて。

探偵 それは… とても遠い所だ。

女 でも、手紙は着いた。十八年たって。十八年かかったんだ。君を呼び寄せる

ためには。僕の夢を君のぼっかりと開いた心の隙間に届けることが出来るまで。君が僕を思い出してくれるまで。

女 　　そして逢えた。

探偵 　　そう、初めて。

女 …… 私、違っていた？ あなたの想像していた人と。

探偵 　　少し…

女 　　もっと美人だと思った？

探偵 　　君はきれいだった。僕の想像よりもずっと…

女 この絵がそうなんですよ。あなたの  
考えていた私。

探偵 うん。

女 (壁の絵をじっと見て) わかった！

これは、ほら、ミア・ファローよ。

あの時の映画の。ねっ。

探偵 … そうだ。ミア・ファローだ。

フオロー・ミーの。

二人、笑いあう。

女 やっと、逢えたわ。

探偵 そう。

女 … どうしたの？ 哀しそう。

探偵 いや。

女 私の仕事のこと？ そうね…

探偵 いや、違う。

女 じゃ、なぜ？

間

探偵 (自分の身体を確かめるように) 思

い出したんだ。なにかもを。やっ

…

僕が何者か。どうして僕が、今、こ

こにいるのか…

女 …

探偵 十八年前、僕は、オートバイから海  
に投げ出された。

冷たい海の底で、僕は、十八年間、  
君を思い続けた。

君に逢いたいと思い、君に手紙を書  
き、君に少しでも近づきたいと思いな  
がら…

ここに居る僕は、僕の思いだ。

君のなかで、生きていたいと願っていた僕  
の思いだ。

僕は、今の今まで、自分が死んだことを  
忘れていた。

女 …… 死んだこと？

探偵 (うなづく)

女 ここは、どこの？

探偵 僕の夢のなか。十八年、君を待ち続  
けた僕の夢のなか。

女 そう、こんな夢を見たことがある。

私は歩いて居るの。知らない街を。  
知らないくせに、みょうに懐かしい。  
街はひっそりとしていて、人の往来も  
ない。眠っているような静けさのなか  
を、異邦人のように、私は、一人で歩  
いていく。逢えるはずのない誰かに逢  
うために。

雪明かりが、二人を包む。

探偵 (窓の外を見て) 雪？

女 (窓の外を見て、目を輝かせる) 雪

じゃないわ。そうよ！ 雪じゃないわ。  
ポップーンよ！ ほら、私たちの夢が  
どんどん膨らんではじめていく！

見て！ 街が埋まっていくわ。私た  
ちを残して、道も遊園地もホテルも、  
どんどん埋まっていく。

ここは、十八年前のあの街。

ポップーンよ！ 降れ！ 降れ！

私たちの夢が膨らんで、膨らんで、  
街を被いつくすまで。

探偵 … やつと、君に逢えた。

二人、みつめあつて：

探偵社暗くなり、路地裏に明かりが入る。娘が佇んでいる。

娘 消えちゃった手品の鳥は、どこに行つたと思う？

鳥かごの中にはソラミミの森があつて、そこに、忘れられたような遊園地があるんだ。ほりまみれのメリーゴーランドや観覧車のさびたゴンドラに乗って、鳥たちはそこでいまでもそれぞれの歌を歌っている。

そう、鳥たちはどこにも行っていないんだよ。いまでも、鳥かごのなかにいるんだ。ただ、見えないだけ。ソラミミの森は、近いくせにはてしなく遠い。そこにたどりつくまで、誰もが気の遠くなるほどの回り道をしなくちゃならない。だから、誰もが行くことをあきらめてしまう。あきらめなかった人だけかそこを見つける。あきらめなかった人だけか、そこを、見つけることが出来るんだ。

暗転。

## 6 探偵社

前以上にうらぶれた探偵社。

老人がストーブを点けようとしている。

老人 ちよ。ガスも止められたか。(諦め

て) オー、寒い。： そうだ、： タ  
キ、タキ、(と、捜す。部屋のすみっ  
こで、丸くなって寝ている猫を見つ  
て) こんな所にいたか。さあ、おいで。  
こう寒くては、猫でも抱いていなくて  
はやりきれん。おお、よしよし： お  
前もひとりぼっちになってしまった  
な。

なんだ？ こんな所に紙きれが：  
(と、猫の寝ていたあたりに、くしゃ  
くしゃになった紙を見つけて、拾う)  
なにか書いてあるぞ。(読む)

「不思議な猫のお話、その三。人間  
になりたかった猫。

革命的脱出に向けての、タキの試み  
は(と、このあたりから娘の声に重な  
って) 失敗に終わった。

娘(声) あたしはやっぱり猫だった。  
わかっちゃった。わかったから、ねえ、  
最後にキスしてもいい？

あたしのキスは、あんたが軽蔑して  
いるふわふわの存在。でも、これは、  
あたしの言葉。人間の言葉でしゃべれ  
ないあたしの大切な言葉。

あたしはキスで、あんたの身体に、  
いっぱい花を咲かせるの。いつか、  
あんたの存在は、その花々の下に姿を  
消してしまっ、あたしのキスだけが  
あんたという存在になる。あんたはあたし  
。あたしはあんた。どっちがどっちか  
分からなくなる。そうになったら、  
あたしとあんたは同じ存在。あたしは、  
あんたのなかで死んでしまっ、  
生まれ変わるの。  
おんなによ。あんたのおんなに。

あんたが愛せる白い手と足を持つ

たくちなしの花みたいなおんなに変  
わったら、ねえ、今度こそ、あんたは  
あたしを愛してくれる？ お・し・  
ま・い」

老人 ばかだよ、お前は。愛して欲しかっ  
たら、待ってばかりいちゃいけないの  
さ。まあ、お前も、二十年近く生きて  
ばあさんになった。年寄り同士、仲良  
くしよう。

と、ドアをノックする音が聞こえる。

老人 誰だい？ 今頃、何の用なんだ。

老人がドアを開けると、男が立っ  
ている。男、中に入ってくる。

男 ここは、探偵社ですか？

老人 そうだが、あいにく、探偵は留守だ  
よ。

男 聞いてほしいことがあるんです。探  
偵さんは、いつ帰ってくるんですし  
ょうか。

老人 帰ってはこんだろくな。

男 困ったな。

老人 わたしじゃ、どうかな？

男 あなた？

老人 かわりに、ここをまかされているん  
だ。

男 じゃ、あなたも探偵さんですか。

老人 ま、そんなようなもんだな。手品で  
消してしまった鳥をずっと捜してい  
るんだ。捜すことにかけてちゃ、負けて  
ないな。

男 捜してほしいのです。妻を。

老人 ほお。： まあ、すわんなさい。

男 (座る)

老人 寒いだろ。ストーブが壊れてしまっ  
たんだ。

男 :

老人 何か飲むかい？ といつても、お茶  
も沸かせなかったか。

男 いいえ、お構いなく。

老人 奥さんがいなくなったって？

男 : 冬の始まる少し前のことでした。

僕が、家に帰ってくると、テーブル  
の上には夕御飯の用意がととのって  
いました。部屋は暖かく、いいにおい  
がしていた。

あいつは台所で、鼻唄まじりに歌を  
うたいながら、あれは、「雨降りお月  
さん」だったか、「月の砂漠」だった  
か。トントントントと、リズムカルな包  
丁の音が、聞こえていました。

僕は、「ただいま」といって、上着を  
脱ぎ、ネクタイを外し、リビングのソ  
ファーに腰を下ろして、テレビのスイ  
ッチを入れました。

六時のニュースが、流れていました。  
どこかの中学生が、いじめにあい、ど  
こかの住民が、訴訟を起こし、どこか  
の街のアパートが火事で燃えた。そん  
な、ありきたりの日常が、写し出され  
ていました。

あいつは、リビングを覗き込んで、  
にっこり笑うと、「ねえ、サラダオイ  
ルがなくなっちゃったの。買ってくる  
から、ちょっと待ってて。」と、言っ  
たんです。

「今から？ いいじゃないか、明日  
で」と、僕が言うと、「あら、サラダ



オイルがなければ、お魚のフライが出来ないのよ。もうあと、お魚を揚げるだけなんですもの。ちよつとよ。ね、ちよつと待ってて。すぐに買って帰ってくるわ」と言って、あいつは、出ていったんです。

そしてそのまま、帰ってきませんでした。

そうです。ちよつと待っててと、サラダオイルを買いに行ったまま、あいつは、帰って来ないのです。

どこかで、凍えていないだろうか。

どこかで道に迷っていないだろうか。

あれ以来、僕は心配で、夜も眠れません。

あいつは、コートも着ないで、出ていったのです。

捜してくれないでしょうか。僕の妻を。

老人 … 耳が…

男 は？

老人 耳が、遠いんだよ。さっきから何も聞こえない。

男 … 帰ります。

男、帰って行く。それを見送った後、老人は、猫を抱いて、ふらふらと窓辺に歩いていく。

老人 雪だ。今夜も冷えそうだな。

おわり